

文化の観賞から経験へ

～茶の湯の紹介を通じた近頃の偶感～

茶の湯 希空会 フーマン宗明

日本とヨーロッパの長い交流のなかで、互いの影響は多種多様ですが、ひとつには19世紀後半のジャポニスムがあげられます。日本美術品の蒐集だけでなく、印象派などの作家に影響を与え、エキゾチシズムがあらわれました。たとえば、モチーフに着物や扇子をつかったり、浮世絵を油彩で模写したりというような作品制作や、その鑑賞です。

また、日本語の外来語はどうでしょう。ゲイシャ・スモウ・フジヤマ（日本ではフジサンと発音しますが…）といった言葉があります。普通は、実際に芸者を揚げたり相撲を取ったりするわけではないので、この名詞につづく動詞の例は、ミルでしょう。いわば、異国情緒のある観賞対象を示すものです。ご存知のように、オーストリアでもさらにポピュラーになったのは、スシ・キモノ・ジュードーなどです。このあとは、タベル・キル・スル。これらは、日常生活のなかで、一般のオーストリア人みずからが経験するような物事です。キモノはガウン代わりだそうで、フトンベッドも販売されていますが、特筆すべきは、寿司と柔道の人気です。寿司・和食レストランがふえて、私なども口福を得ております。

あるときウィーンの柔道クラブにまねかれて、茶の湯の実演をしたことがあります

ました。観客、すなわち部員の多くが小中学生。ふだん稽古や試合をする道場の畳の上での、はじめて見る茶の湯はさぞ珍しかったことでしょう。実演のあとによく拍手をいただきますが、このときは口笛付でした。国連ウィメンズギルドのバザーにおける、カルチャーショーでも実演しました。控室では、見事な民族衣装のグループあり、一人で着替えて準備する参加者あり、待機中もなんとなくうきうきした雰囲気を感じました。華やかでにぎやかな各国のダンスやコーラスのなか、茶の湯は独特な‘静寂の披露’だったのではないかと思います。



(FOTO ; FRANZ GRUBER)

茶の湯は、‘ティーセレモニー’としていられています。点前の実演を見ると、たしかに儀式という印象ですが、それは一要素にすぎません。書や花を飾り、美術工芸品でもある茶道具を用いて点前し、懐石料理とメインのお茶を供し、主客が誼を結ぶのです。つまり、禅の影響もある茶の湯は多面的な総合芸術ですし、なによりも茶のもてなしを主客ともに愉しむものです。



日本広報文化センター・ワークショップにて
(2008年)

私は95年に移住以来、試行錯誤のみちのりですが、茶の湯・着物・和菓子の紹介をかさねてきました。そのおり、いろいろおたずねがありました。‘茶を飲むといえば、自分はティーバッグをカップに入れて湯をそそぐだけなのに、なぜこんなにややこしくするのか?’ ‘メディテーションなのか?’ ‘音楽をあわせないのか? (琴の音が似合うという先入観からか、鳴り物がないとさびしいという感覚からか、音楽の都ウィーンらしい質問?)’ ‘着るたびに長い帯を複雑に結ぶのは大変ではないか?’ ‘帯は何のためにあるのか? 女性は腰が冷えやすいから、その対策にいいのか?’ 着物の話で一番驚かれたのは、洗い張り(ほどいて洗って張り伸ばし、縫いなおす)でした。

茶会や点茶のミニワークショップに、繰り返し参加される方もあります。何でもそうですが、関心を持つことから始まり、体験することで、親近感がまし理解が深まり、楽しみとなるのでしょう。大きな言い方になりますが、日本文化を観賞のみならず経験することで受容していく、ということです。このような展開の一端に微力を尽くせたら、と願っております。

オーストリア日本人会の弥栄をお祈り申し上げます。

南山の寿の如くかけずくずれず 詩経